（大正十二年九月十五日發行）　第九十四號（大正十年二月五日第三種郵便物認可）　（毎月三回五ノ日發行）

日本醫事新報

第九十四號
（九月十五日發行）

發行所
牛込區赤城下町八十一番地
日本醫事新報社
電話牛込二八三六番
振替東京二五一七二番

◇震災來！！！

「大正十二年九月一日」は吾國に歴史のあらん限り忘るゝ事の出來ない日とは成つた。此の日午前十一時五十八分、突如として東都を襲ふた大地震は、三百萬市民をして驚神愕魂せしめ、同時に數十ヶ所に揚つた火の手は、折柄の烈風に煽られ全市に燃え擴がり、さしも榮華を誇つた東京市も一朝にして焦土と化してしまつた。其慘狀は到底筆舌の盡し得る所ではない。眞に空前にして恐らく又絶後であらう。

◇本社消息

本社は去月十五日を以て東兩國より神田ハタゴ町の新築事務所へ移轉し、未だ半ヶ月も經ざるに、測らずも今回の大地震に伴ふ火災の爲、九月一日午後八時遂に不幸全燒の厄に遭ふた。重要書類は幸くも之を搬出したが、器具機械藥品帳簿書冊の一切は擧げて烏有に歸せしめた。梅澤社長以下植月、山口、中島、宇山、磯、田邊、的場、芦原、武石、青山、坂本、梅村、猪股、井上、杉山の各員は何れも無事同三日より不取敢事務所を梅澤社長宅の牛込區赤城下町八十一に開設し、社員一同不眠不休を以て災後の恢復に努力し、茲に第九十四號を發行し得るの運びに至つた。

◇燒失せる病院

所謂「病院街」の稱ある駿河臺の各病院を初めとし日本橋、京橋、芝、下谷、淺草、本所、深川の七區内の各病院は全部燒失し其他の區内にも祝融氏に見舞はれたものが尠くない。左に其の主なるものに就て略報すれば、

◇順天堂病院　は一日午後三時燒失、職員患者は何れも無事にして一部は佐藤院長本邸に一部は赤坂分院に避難せしめた。附屬研究所は化學室の一部を燒きたるのみにて他は皆無事。

◇杏雲堂病院　一日午後二時燒失、最初お茶の水女子高等師範學校に避難したるも同校に延燒の爲上野精養軒に移り更に同處も危險の爲上富士前の小學校分散場に逃げ延びた。

◇濱田病院　本郷區東片町富士川游博士邸へ避難。

◇東京鐵道病院　芝山内黑本尊へ避難した。

◇東京慈惠會病院　同上に避難す。

◇東京市本所病院（本所松代町）　百八十名の患者は一人も殘らず小松川原に避難せしめ五日に至つて駒込病院に移送した。

◇聖路加病院◇胃腸病院（麹町内幸町）◇南胃腸病院（京橋木挽町）◇橋爪病院◇樋口病院（日本橋龜島町）◇林病院◇小川眼科病院◇樋口病院（芝愛宕町）◇矢島病院◇高輪病院◇中洲病院◇塙病院◇朝岡病院（本所長岡町）◇延壽堂病院◇杉本胃腸病院◇井上眼科醫院◇金杉病院◇駿河臺病院◇賀古病院◇瀨川病院◇阿久津病院◇長谷川病院◇前田眼科病院◇廣川（和一）病院◇桐淵眼科病院◇田代病院◇肥田病院◇林（曄）病院◇片山病院◇小此木病院◇千葉（眞一）病院◇濱町病院◇櫻井病院◇山村病院◇樂山堂病院◇厩橋病院◇明治病院◇佐々木（森男）病院◇森（武美）病院◇瀨川病院◇淺草病院を初め前記七區内に左る病院醫院診療所は悉く燒失した。此の間に於て不思議に類燒を免れたのは神田和泉町の和泉橋病院、内務省衛生試驗所であつた。

◇之は無事

次の病院、研究所は幾かに無事なるを得た。但し何れも多少の被害なきはなく甚だしきは到底使用に堪えざる迄に大破したものもある。

◇東大附屬醫院◇同難司ヶ谷分院◇慶應附屬醫院◇傳研◇北研◇養生園◇和泉橋病院◇赤十字社病院◇日本醫專◇東京醫專◇女子醫專◇駒込病院◇東洋内科醫院◇榊病院◇順天堂赤坂分院◇吾妻病院（吾妻博士は横死）◇小石川病院◇坂口（勇）病院◇第一衛戍病院◇濟生會病院◇松山病院（松山陽太郎、同陸郎氏宅も無事）◇久野病院◇東京至誠病院（牛込河田町）◇早稻田病院◇篠田病院◇青山腦病院◇巢鴨腦病院◇戸山腦病院◇井村腦病院等は何れも災厄を免れ得たのは幸ひである。

◇東大の狀況

◇三教室燒失　東大醫學部にては地震と同時に藥物醫化學の二室より各別に發火した、藥物教室では林博士は階上の教授室に在り階下より燃え出したる黑煙猛火に包まれ乍ら辛くも身を以て免れ引續き消防隊を指揮し一度は鎮火したが、醫化學教室より吹きつけられ遂に全燒の厄に遭ふた、一方醫化學教室よりの發火は隣接の生理教室を併せ燒いた。

◇柿內博士に無線電信　柿內三郎博士目下外遊中で印度洋か紅海を航行中と認めらるゝので直ちに無線電信を以て教室全燒の旨を急報し途中より引返さしむることゝなつた。

◇罹災者に教室開放　東大の被害としては以上の三教室燒失のみを以て他に格別の事も無く附屬醫院の患者は一時庭前に避難させたが鎮火後再び病室に收容した。基礎科教室の中衞生、病理、法醫（標堂）の三教室は直に罹災民の避難所として開放した。何れも四五十名宛ての人員を收容して多大の便宜を與へたことは寔に機宜の處置と謂はねばならぬ。

◇竹內教授の奮闘振り　中にも目醒しきは竹內松次郎博士の奮闘振りである、同博士は震災當日より不眠不休の活動を開始し直ちに教室全部を開放して其の收容力の許す限り多數の避難民を迎へ入れた、次いで機敏にも同博士は直に府下野方村に赴き馬鈴薯二百貫、茄子百貫を買入れ牛車三輛を以て東大に急送せしめ自らは自轉車に打跨り各所を奔走盡力しつゝある。同七日以來は教室員を指揮してチフスワクチン製造の爲寢食を犧牲にして斡旋して居られる。

◇慶大の狀況

慶大は地震の爲器物及び藥品の損害莫大にして目下の處被害計算は殆んど立たざれども幸にして建物には何等の損害もなかつたといふ。

◇北里博士無事　北里博士宅、一時は延燒せんとせしも專ら防火に努めたる結果幸にして無事なるを得た。

◇北島多一博士宅　震害は蒙りたれども火災はない博士は無事慶大に出勤。

◇宮島幹之助博士　伊豆伊東北里博士別邸に家族と共に居られ皆無事なる由なれども交通不便の爲歸京は遲延せらるゝ由。

◇職員にて火災の厄に遭つた者は、宮島幹之助博士、藤浪剛一博士、笹川正男博士、唐澤光德博士、眼科の高木六郎學士、金井章次博士の諸氏で死傷者の無かつたのはまづ不幸中の幸としなければならぬ。

◇個人消息

◇子爵石黑忠悳氏　老子爵は安政大地震の時にも江戸に居られ十一歳の少年にて震災に遭つたが無事であつて子供心にも災後釘の缺乏を憂ひ機敏に買集めた處母堂より「商人染みた行ひをすな」と叱られたといふ逸話あり。今回も御無事で記者の見舞に對し「こちらは皆無事だつた、貴下の方の社は燒けたらう」と述べられた。邸前に老子爵自筆の墨痕鮮かに記して曰く「井水なれど清水也お上り下され」

◇三宅秀同鎭一博士　火災區域外にて何れも無事。

◇三浦謹之助博士、駿河臺の自邸は燒失、博士例の優しい眼附をして『どうせ燒けるもので造つた家だから燃えるのは當然さ』と破顏一笑された。姻戚の三宅秀氏方に避難。次いで、本郷西片町十（元鹽谷卓爾氏宅）に假寓された。

◇入澤達吉博士　自邸燒失着のみ着のまゝ身を以て逃げられた、其日から醫學部長としての重責を盡す爲不眠不休である。入澤內科一の側一號へ避難。

◇稻田龍吉博士　自邸無事、御本人は箱根宮の下に滯在中に付急使を以て安否を問合せた處「無事なるも交通機關破壞して歸れぬ」との事であつたが、名古屋を經て十日歸京。

◇土肥慶藏博士　自邸及一同無事。

◇橫手千代之助博士　同上。

◇長與又郎博士　傳研にて執務中、額部に負傷せられたが窟せず繃帶の儘にて活動し、傳究構內に多數の罹災民救護中。尙內幸町の自宅燒失の爲め麻布の新邸へ移る。

◇木下正中博士　濱町病院で防火中、手首に火傷を負はる。

◇吾妻勝剛博士　鎌倉に佐紀子女王拜診中建物崩壞し壓死を遂げられた。

◇大瀧潤家博士　◇荒井恒雄博士　◇井上誠夫博士右は何れも自邸燒失す。

◇林曄氏　築地の病院は消失せるも御本人は牛込區辨天町の邸宅へ避難。

◇南大曹氏　日の夜病院延燒と同時に院長、患者全部と共に自働車をかつて翌日午前一時赤坂なる南氏宅に收容避難。

◇竹野芳次郎博士、淺原愼次郎博士、望月寬一博士守屋伍造博士の諸氏は何れも無事。

◇內藤和行學士　令兄不幸にして今回の震災にて橫死を遂げらる。

◇緒方知三郎博士　震災當時鎌倉に在り幸ひ無事にて入日歸京。

◇田所喜久馬博士　本郷彌生町三、佐藤敏二氏方に避難。

◇柳井貴三學士　本所橫綱町に開業の氏は被服廠跡にて橫死。

◇三輪德寬博士　安否未だ定かならず痛心に絕えず

◇岡田和一郎博士　一同無事、夫人は震災當時鎌倉に在られたが命からくにて歸京せらる。